三芳町を好きになってほしい――。

想いを守る、お茶屋さん。

期間限定でオープンしている喫茶&ギャラリー「いちの草」。なぜお店を始めたのか、その想いに迫ります。

江戸時代から続く落ち葉堆肥農法を守り続ける伊東さんご一家。秋になるとこの場所はさつまいもの販売スペースに。全国から買い求める人で賑わいを見せます。

左が「弘東園」の店舗で右が「いちの草」。さつまいもの時期はいもの販売所になっています。

秋になるとけやき並木に「富の川越いも」ののぼり旗がなびき、いも農家が立ち並ぶ「いも街道」。その西にあるお店「弘東園」ではさつまいもだけではなく、お茶も取り扱っています。「さつまいもの時期だけでなく、通年で三芳町に来て好きになってもらえるきっかけを作りたかったんです」と話すのは、弘東園に隣接する場所で2月から8月までの期間限定のカフェとギャラリー「いちの草（そう）」をオープンさせた店主の伊東久子さん（58）は熊本県宇土市出身。「38年前に主人と結婚し、そこから三芳町で暮らすようになりました」と話す久子さん。見知らぬ土地で不安はなかったのでしょうか。「義母がとても良くしてくれたので不安はありませんでした。常々、江戸時代から守られているこの地を大切にすることを話し、農に携わる者としての志を示してくれました」。

その想いはお店の名前に繋がります。「『いち』は義母の名。『草』はお茶の葉と義母の『想』を守り続けたいので『いちの草（そう）』としました。代々守り続けたこの地で作られたお茶を、皆さんに楽しんでもらうことで、想いを繋げることができると思います」と言う久子さん。「お茶が三芳町で作られていることを知らない人が多いと思います。お茶を通じて、ここが地域のコミュニティの場になれば」と話す背中で孫の万葉ちゃんがスヤスヤ寝ていました。

その万葉ちゃんの父、佳孝さん（33）。9年前、伊東家に婿として入り、農に携わるように。「それまでは自動車の営業。まさか農業に携わるとは夢にも思っていませんでした。新鮮なことばかりで、農への挑戦を楽しんでいます」と自身がパッケージデザインを手がけたお茶を手に笑顔を見せる佳孝さん。「お茶のことを全く知らない自分だからこそ伝えられることがあると思います。消費者目線で今の時代に合うものをと考えて、派手なパッケージにしてみたりとか」。

佳孝さんも町外出身。「隣の所沢市出身なのに、三芳町のことを全く知らなかったんです。でもいざ自分が住民になったとき『三芳町って魅力がたくさんある』と痛感しました。お茶もさつまいもも三芳町も『知られていない』ことを理解して、10年先まで見据えたお茶作り、販売などを若者の目線で考え、挑戦していきたいです」。■

❺いちの草の店舗内から外を見つめる久子さん。その背中に安心しているのか、孫の＝＝ちゃんがスヤスヤ眠っています。

❶❷弘東園で作られるお茶を楽しむことができるいちの草。❸❹「陳列棚でより目立つように金色のパッケージにしました（佳孝さん）」。

10年先まで見据えたお茶作りに挑戦したい――。

さつまいもとお茶の両方を栽培している伊東蔵衛さん。「昔は従業員を雇うほど大変でしたが、今は機械が進歩して家族で切り盛りすることができるようになりました」。

丁寧なお茶作りで上質なお茶を

農業を始めて10年足らずですが、平成26年に農林水産大臣賞を受賞することができました。それは町内に親身になって相談に乗ってくれるよき先輩たちがいたからです。受賞したときは恩返しができたと思ったと同時に、その名に恥じない背中を見せていかなければならないという使命感も芽生えました。丁寧に作った上質なお茶は手に取ると「シルク」のような肌触りで、見た目も綺麗。丁寧にお茶作りを心がけ、皆さんに上質なお茶を提供し続けていきたいです。

第60回お茶まつり狭山茶品評会
農林水産大臣賞受賞
伊東 佳孝さん(33)